

2011年11～12月の期間で寄生虫診断分野に松林が派遣されました。

インドネシア国内では寄生虫感染による被害が多数報告されています。スバンDICには、多い時には1週間に100検体の血液と糞便検査依頼があります。私が滞在した寄生虫症診断ラボには、2名の獣医師と1名の技術者が配置されています。うち2名は新規採用者で、当初は寄生虫学の講義や検査器具の使用法の指導等に時間を費やしましたが、非常に習得が早く、短期間で検査訓練に移

ることができました。検査依頼検体を用いて、日本から持参した写真や資料を参照に類症鑑別指導を行いました。後半期には、実際に牛、豚、鶏農家を訪問し検体採取の実地指導を行いました。隔週で結果報告会を開催し、ラボ間の情報交流を行いました。今回の出張により、スバンDIC寄生虫症診断ラボに簡易でより感度が高い糞便・血液検査技術を導入することができました。今後は日本からもできる限り支援を行い、スバンDICの家畜疾病診断能力向上および地域への支援体制強化に貢献したいと思っております。

TOPICS

NARO Research Prize 2011 の受賞

平成23年度第5回農研機構役員会（平成23年11月17日）でNARO Research Prize 2011の授賞式が行われ、理事長より細菌・寄生虫研究領域の楠本正博主任研究員に表彰状と記念のトロフィーが授与されました。表彰対象研究成果

「腸管出血性大腸菌 O157 ゲノムの多様化を引き起こす因子の発見」
研究の概要

細菌のゲノムにはISと呼ばれる転移因子が数多く点在していますが、これまで細菌ではISが転移す

る際にゲノムから切り取られてしまうと菌が生残できないと考えられていました。しかし本研究では、O157には菌を死滅させずにゲノムからISを切り取る仕組みがあり、その際にIEEと名付けたタンパク質が重要な役割を果たすことを明らかにしました。IEEの働きによりISの切り取りと転移が頻繁に起こり、菌のゲノムに大規模な欠失が生じるためO157に多様性が生み出され、このIS分布

を調べるIS-printing法はO157の菌株識別に利用されています。

（研究調整役）



「第5回 食と医療の安全に関わるプリオン病の市民講座」の開催

動物衛生研究所プリオン病研究センターが事務局を務める、食と医療の安全に関わるプリオン病の市民講座実行委員会（代表 東北大学大学院 堂浦克美教授）による表記市民講座が、平成23年10月23日、九州大学病院キャンパス、コラボレーションIにおいて開催されました。

今年は、農林水産省、厚生労働省、ヤコブ病サポートネットワーク、九州大学の後援を得て行われ、市民講座としては5回目となります。昨年からは、プリオン病だけでなく食の安全の観点から口蹄疫や鳥インフルエンザについて、また本年は東京電力福島第一原子力発電所

事故を受け食品の放射能汚染に関わる話題も提供されました。最後の総合討論では、病気の解説、研究の現状、食品・農産物に関わる行政などに対して広範囲な質疑が寄せられ、また講師間でも意見のやり取りが行われるなど、活発な討議が行われました。（情報広報課）

